

✿ 文化的景観研究集会（第2回）の開催

景観研究室では、2009年12月18・19日の2日間に渡り、文化的景観研究集会（第2回）「生きたものとしての文化的景観－変化のシステムをいかに読むか」を開催し、200名余りの参加を得ました。文化的景観は、物理的なモノありきではなく、読解によって浮かび上がってくる領域的なまとまりであること、そしてそれが時間をかけて徐々に形成されたもので、現在も生き、変化しながらもアイデンティティを保ち続ける、いわば生き物のごとき性格を有するものです。本年度の研究集会では、「生きたもの」としての文化的景観における変化のシステムのとらえ方を、議論の主題として設定しました。

1日目は、「文化的景観における変化のシステム」をテーマとしました。文化的景観における変化の現象把握としては、横張真氏による近江八幡の水郷景観における葦原の変遷が示唆に富んでいます。50年間の葦原の領域を追いかけると、明らかに場所が移動していながら、面積の総和には大きな変化がないことが明らかにされました。

変化に関しては有形の要素が問題にされやすいわけですが、文化的景観は有形と無形の要素が相互に絡み合いながら成り立っているものであるため、2日目は、有形と無形の関係、つまりモノとコトの関係をテーマとしました。モノにこだわりすぎると、変化を必然とする文化的景観の本質を見誤ることが指摘されましたが、言い換えれば、モノとコトを横断的にとらえねば文化的景観の価値評価はなしえない、という提言と受け取ることができます。

モノとコトとのバランスを、いかに現状の保護制度によって担保していくのか。この議論を次年度以降の活動に活かしたいと思っています。

（文化遺産部 清水 重敦）



文化的景観研究集会(第2回)における総合討議

✿ カンボジア初の遺跡博物館オープン

カンボジアのシェムリアップ州に位置する世界遺産アンコール・ワット寺院の北東約20kmに、タニ窯跡群は位置しています。ここは、アンコール王朝時代（802～1431年）に、クメール陶器を生産していた窯跡群です。このたび、2009年12月15日にタニ窯跡等出土の陶器を展示したアンコール・タニ窯跡博物館が開館しました。

タニ窯跡群は、1995年にカンボジアで初めて確認・調査された窯跡です。1996年から2001年にかけて奈良国立文化財研究所（当時）と上智大学が発掘調査・研究をおこないました。その後、次々とクメール陶器窯跡が発見・調査され、このタニ窯跡群調査は、クメール陶器研究の先駆けとなりました。

その後、現地の文化財組織APSARA（アンコール・シェムリアップ地域保護管理機構）は、日本国政府による草の根無償援助とカンボジア政府からの資金援助を受け、タニ窯跡に遺跡博物館を建設する事業を開始しました。奈良文化財研究所は、博物館の展示計画から、模型制作、出土陶器の修復と展示、展示映像作成などで全面的に協力し、このたびカンボジア初の遺跡博物館の開館となりました。

開館式典においては、奈文研の功績に対し、カンボジア政府からサハー・メトレイ勲章が当研究所所長へ贈呈されました。

アンコール・タニ窯跡博物館には、昨年度に奈文研で研修を受けた若手研究者が学芸員として常駐し、今後さらなるクメール陶器研究への貢献が期待されます。

奈文研では、アンコール遺跡群内に位置する西トップ寺院の調査・研究を実施しており、遺跡修復活動を視野に入れた新たな事業を計画中です。

（企画調整部 佐藤 由似）



田辺所長による開館テープカット